
平和・人権教育と国際連帯部会

研究テーマ 「平和・人権教育と国際連帯の広がりをめざして」

I 研究の内容

1 研究の方法

- (1) 部員各自の実践報告
- (2) 情報交換，情報提供による学習や臨地研修
- (3) 授業提案による研究（統一授業研）

2 研究経過（含む予定）

- 5月10日 研究組織，研究テーマ，研究内容・方向性について検討
- 5月24日 研究計画決定，情報交換，授業者決定
- 6月14日 実践報告，授業案検討
- 7月31日 講演会「異文化と出会うこと」（JICA山梨 オードラン萌様）

- 8月30日 研究授業
- 9月20日 実践報告 県教研リポート検討
- 11月29日 実践報告 研教研還流報告
- 1月10日 実践報告 授業案検討
- 2月 7日 研究授業（実践報告）
- 2月14日 研究のまとめ

II 成果と課題

1 成果

【研究授業に関して】

- ・本部会として小学校6年生を対象に学級活動の時間を活用し研究授業をおこなった。災害発生時の人権について，子どもたちが支援者としての立場から，相手の立場に寄り添ったとりくみを考える学習を通じて，互いの人権を尊重することの大切さに気づくことができた。また，付箋紙を使って意見交換をすることで，個人の思いが吸い上げられ，広がりのあるまとめとなった。今回，支援者という立場で考えさせたことで，能動的に関わる意識が高まり，今後の日常生活へのつながりが期待できると考えられる。押しつけではなく，相手の気持ちを考えながら「てっだいましょうか？」と行動する後押し・きっかけとなる実践だった。

【研究内容・組織について】

- ・中学校の先生や新たに部会に入られた先生方が多くいらしたこともあり，小中の連携が図られ，新しい視点や感覚で研究を進められた。
- ・研究テーマを意識しながら，学校や児童生徒の実態に応じた授業実践を一人ひとりお

こなうことができた。また、こうした実践を持ち寄り、情報交換をおこなうことで効果的な授業過程や指導法について学ぶことができた。

- ・指導助言者の先生に毎回資料を出していただき、実践だけでなく知識も増やすことができた。その中で、普段何気なくおこなっている日常の指導についても考え見つけ直すことができた。

【夏季学習会（講演会）に関して】

- ・7月31日、JICA山梨デスク国際協力推進員のオードラン萌様を講師にお招きし「異文化と出会うこと」という演題で講演をいただいた。世界の8割にあたる160カ国が発展途上国であり、「安心して水が飲めない」「子どもが勉強できる状況にならない」「病気でなくなる人が多い」という現状や、派遣されたニカラグアでの実体験などの話を聞くとともに、異文化と出会う意義（①自分と異なるものを知ること、自分を見つめ直すことができる。②より多くの「自分と異なるもの」に出会った人の方がより豊かな人間になれる。→生物が多様性を必要としているように人間もまた多様性が必要）について考えることができた。また、異文化接触の3段階として、
①Downloading（自分の知識・経験と照合して判断しながら接触する）
②Seeing（自分が知らない事を知ろうとして接する）
③Sensing（自分事に感じながら接する。地球市民的感覚）を示していただき、実際の学習の場面で子どもたちをどう関わらせていくか等考える良い機会となった。

2 課題

- ・これまでの研究成果を継続し、さらに発展・充実を図っていくために、部会の存続をどう図っていくかが大きな課題である。
- ・授業実践以外の領域でも人権教育の視点を持ちながらとりくんでいく必要がある。

Ⅲ 成果物

1 授業案

第6学年学級活動指導案「災害発生時の人権について考えよう」

田辺 博幸（大和小学校）

2 実践報告資料

平和教育「平和教育の実践に向けて」

日野原和貴（八幡小学校）

平和教育 絵本「いわたくんちのおばあちゃん」

岩下 秀人（後屋敷小学校）

平和・人権教育（中学校英語科）

「マラウさんの人生を通して考える」

広瀬竜太（山梨北中学校）

3 提供資料

高添 勉（東雲小学校）

- ・人権教育資料「国民の祝日について」
- ・国際連帯資料「国際理解教育・他文化共生とは」
- ・人権教育資料「学校教育における人権教育の改善・充実の基本的な考え方」
- ・人権・同和教育資料「学校における人権教育の日常的な推進に向けて」

（部長 岩下 城）

第6学年 学級活動指導案

指導者 田邊博幸

- 1 題材名 「災害発生時の人権について考えよう」
- 2 資料名 「みんなの人権が守られる避難所にするために」
(神奈川県：人権学習ワークシート集 小・中学校編より)
- 3 題材設定の理由

(1) ねらいとする価値

教育活動の場で行う人権学習の目的・ねらいのひとつとして、児童生徒の「人権感覚・人権意識」を高めることが挙げられる。人権を「人権問題」としてのみとらえたり、自分とは直接関係ない遠い世界の事ととらえれば、人権に関する教育や学習の場は、こうした人権問題を「解決」するための、あるいは「知識」を得るための場となり、おのずと「堅苦しい」ものとなりがちである。勿論、こうした学習も児童生徒の実態や授業者の思いをふまえれば場合によっては必要であるもののそれだけでは人権感覚が身についたものとはならないケースもある。今回の人権学習の実践では、こうした背景をふまえさらに効果的に人権学習を進めるために、参加体験型学習の形態を取り入れ児童の人権感覚（感性的感覚・セルフエスティーム・共感能力・想像力・コミュニケーション能力・人権に関する理解）を育成していきたいと考える。

人権感覚・人権意識という言葉の意味については、たとえば、次のような説明があります。

【人権感覚】

人権の大切さや価値、人権が擁護され、実現されている状態を感知し、これをよしとし、反対に、これが侵害されている状態を感知してこれを許せないとするような、価値志向的な感覚。

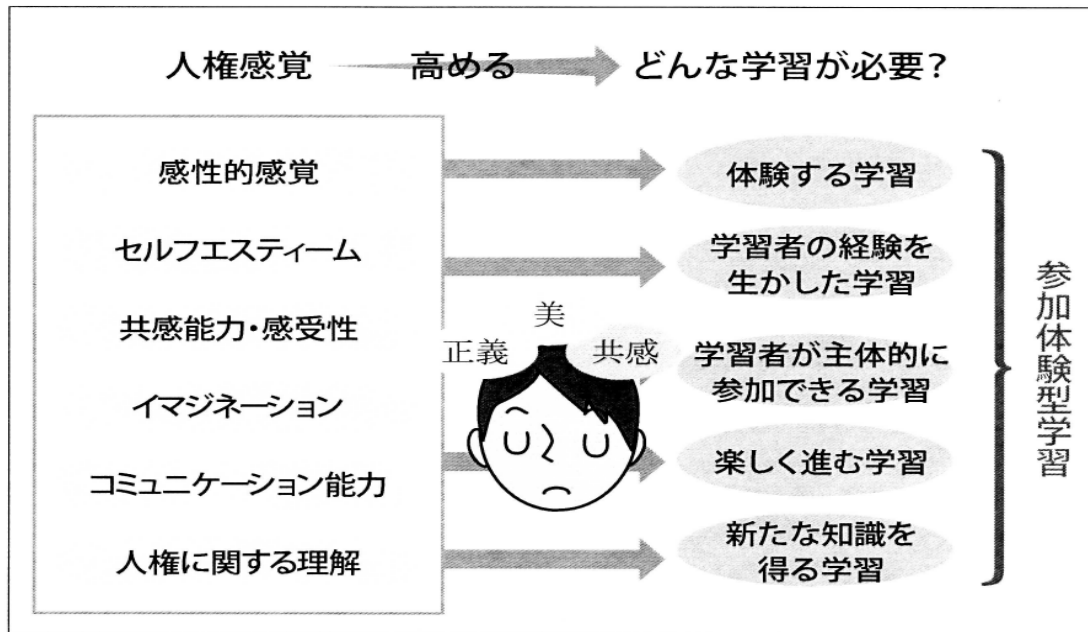
【人権意識】

人権感覚を行動に結びつける働きをする意識。例えば、差別を変えようとする意識。

「人権感覚育成プログラム研究開発事業報告書」2002年

同報告書の中で、福田弘筑波大学教授は、人権感覚を構成する要素として、次の6点を挙げ、これらの要素を高めることが、人権感覚を育成することになるとしています。

- ①正義感覚、真理感覚、美的感覚などの感性的感覚
- ②感覚主体、判断主体としての個々人のセルフエスティーム（自己尊重の感情）
- ③共感能力・感受性（敏感さ）
- ④想像力（イマジネーション）
- ⑤繊細なコミュニケーション能力
- ⑥人権に関する科学的・客観的理解



『青森県人権教育学習推進協議会 人権ハンドブック基礎編より（2005年 3月）』

(2) ねらいに関わる児童の実態

男子5人、女子6人の学級である。

児童の多くが公正・公平・正義といった価値の大切さについては認識している。4月から最上級生となり学級内での活動は勿論、委員会・クラブなどといった児童会活動や学校行事の中で、公正・公平・正義を意識しとりくむ児童が多くなってきているが、利害関係がからむ活動になると、利己的な行動をとってしまう場面もあり、まだまだ個人差が大きいと感じている。また、11人と少人数の集団でこれまで6年間学校生活を送ってきたこともあり、互いのことを理解できている部分が多い反面、人間関係（友人関係）の固定化・序列化が見られ、人間関係（友人関係）を調整する部分でも個人差が大きい。

人権に関わる部分の学習についてはこれまで、道徳の学習（いじめ問題・東京電力による原発事故問題）や学級活動（情報モラル教育）を中心に扱ってきている。差別や偏見が生まれる背景、また、こうした問題が起きないようにするための方策について学んできている。

こうした様々ととりくみを通じて、いじめや暴力、偏見や差別はよくない事、許してはいけない事、自らおこなわない事という人権感覚や人権意識が高まってきている。これまでの人権学習では、様々な人権問題を解決するため、副読本や参考資料を取り上げ、知識を得る・学ぶことに重点が置かれた授業形態を多く実践してきた。こうした学習を通じて人権に関する客観的理解は深められてきたと思うが、上記した人権感覚を構成する要素（6要素）である、児童の共感能力・感受性、イマジネーションといった部分の育成では十分であったとは言えない部分がある。児童

の人権感覚を身につける学習を効果的に進めるために、参加体験型学習を新たな試みとして今回取り入れ実践していきたいと考える。

(3) 実践的防災教育の観点から

本年度本校は隣接する大和中学校とともに、「実践的防災教育推進校」として県より指定を受け、「いのちを守り、たくましく生き抜く力を育てる防災教育の実践」というテーマを設けとりくみを進めてきている。防災教育の目的として以下の3点を挙げ、学校内の安全管理体制の再確認・強化は勿論、新たな試みとして児童生徒が様々な自然災害から自らの命を守り抜くための知識を学び、様々な危険を予測しその危機を回避する能力の育成にも努めてきている。

本時の学習では(3)の体験的防災教育推進の一環として、安全で安心な社会づくりに貢献しようとする意識を高めるため、支援者としての立場に立ち、問題点を明らかにしながら個人や集団として、どうその問題を解決していくか自らの体験をもとに考えさせたい。大きな災害(大地震・津波・洪水等)が発生した場合、誰もが切迫した状態にあり、強い不安やストレスが長期にわたり継続することから、相手の人権に対する意識が薄らぎその結果、乳幼児や障害者、高齢者、外国人などいわゆる災害弱者への配慮が不足し、時には心ない言動により人権が侵害される場合がある。こうした特別な配慮を必要とする方々の状況を考えたり、避難所における問題を考えたりする学習を通じて、どのような場面でも互いの人権を尊重し、行動することの大切さについて理解を深めていきたいと考える。

(1) 安全教育の開発・普及(避難訓練)

- ①児童生徒が自然災害の危険から、自らの命を守り抜くために、主体的に行動しようとする態度を育成する。
- ②児童生徒が自然災害時の危険を予測し、回避する能力を育成する。

(2) 学校の安全管理体制の構築・強化

- ①登下校時を含めた日常的な学校生活における児童生徒の安全管理を確保し被害を最小限に抑えるために、学校の安全管理体制を構築し強化を図る。

(3) 体験型防災教育の推進

- ①児童生徒が地域の自然災害発生時の危険とその要因を活動を通して理解し「支援者としての視点」から、安全で安心な社会づくりに貢献しようとする意識を高める教育手法の開発・普及を行う。

4 本時について

(1) 日 時 2017年 8月30日(水) 午後2:00~午後2:45

(2) 場 所 6学年教室

(3) ねらい 相手の立場や気持ちに寄り沿ったとりくみを考える学習を通じて、災害発生時においても、互いの人権を尊重することの大切さに気づくことができる。

(4) 展 開

課程	学習活動と主な発問	学習の様子を見取る視点	指導上の工夫・留意点
導 入 5 分	<p>①避難所を写した1枚の写真を提示し情報を得る。</p>  <p>東日本大震災の避難所（宮城県石巻市蛇田小学校） 『時事通信：避難所写真 2011年 3月12日』</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の教室 ・子ども、大人、お年寄り ・障がい者・外国人・乳幼児など </div> <p>②写真の説明を聞き、状況により教室も避難所になること、また、様々な立場の人が避難していることを知る。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・避難所となっている場所やどんな人が避難されているか、写真を見ながら確認させる。 ・写真から得られる情報以外に障がい者や外国人・乳幼児や妊婦の方も避難していたことを加えて説明する。
	<p>③本時のねらいを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>みんなで意見を出し合い、よりよい避難所（教室）をつくろう。</p> </div>		

展	<p>④避難時の状況を知り、お年寄り・障がい者・小さな子どもなどの立場になり、問題点を班ごと探る。</p>		<ul style="list-style-type: none"> • 班ごと実際に教室内で活動し起こりうる問題点を考えさせる。 • 問題点を付箋紙（赤）に書き、教室見取り図上に、場所とともに示すように説明する。 • 班内で意見が相違した場合はどちらかにまとめなくてもよいことを伝える。
開	<p>⑤④についてグループ（班）ごとに発表する。</p> <p>⑥班ごと挙げた問題点について、解決策を考える。</p>	<p>◎相手の立場（状況）を想像し、そこから問題点を考え、話し合いの中から解決策を探ることができたか見取る。 （児童記述）</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 解決策を考え付箋紙（青）に書き、教室見取り図上に示すよう説明する。 • 全ての問題点について解決策を示さなくてもよいことを伝える。 • 解決策が複数でもよいことを伝える。 • 解決策をこの後、グループごとに発表することを伝える。 • 班内で意見が相違した場合はどちらかにまとめなくてもよいことを伝える。 • 様々な解決策を全体で共有する場とし活動させる。付箋紙（黄）に理由を挙げながらまとめさせる。
32 分	<p>⑦⑥について他グループの解決策の中から、よいと思った解決策を見つける。</p>	<p>◎自らの感想を記した言葉から、人権感覚や人権意識を高めることができたかを見取る。 （学習ノートへの記述）</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 学習ノートに記入。 • 学習を通じて、自分以外に特別な配慮や援助を必要とする人が存在することを認識し、こうした人たちの思いや願いに寄り添うことの大切さ

終 末 8 分	<p>⑨まとめの話しを聞く。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>◇災害発生時（避難時）においても、相手の立場を考え（想像）、思いやりの心を持ち、互いの人権を尊重し行動することが大切である。</p> </div>	<p>れさせると同時に、自ら進んで実践してみたい解決策をまとめさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数名に発表してもらおう。 ・児童から出された意見をもとに、改めてねらいをおさえる。
------------------	---	---

5 学習ノート

ひなんじよ よりよい避難所（教室）にするために

6年 名前（ ）

8月のとても暑い日、大きな地震がおきました。家はこわれ、中に入ることができないため、そのまま近くの学校に家族全員で歩いて避難することになりました。

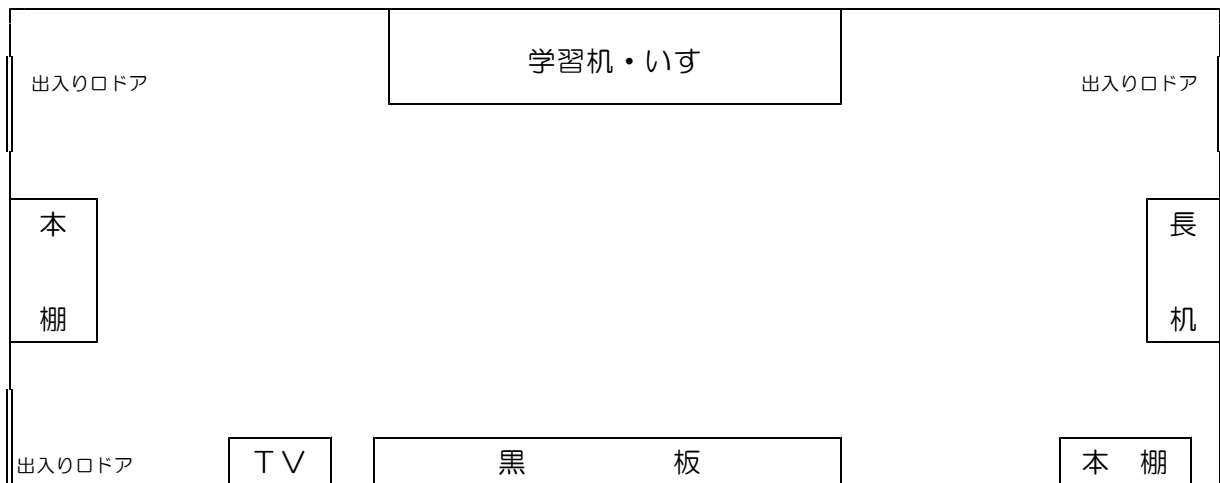
学校に着いたのは、午後2時頃でした。児童玄関で受付をすますと6年教室に案内され、かんパン1ふくろ、ペットボトル（500mL）が一人ひとりに配られました。教室に入りすわっていると、次々に避難する人がやってきて、教室はみるみるいっぱいになりました。

地震のため停電と断水（水道水が出ない）になっていたため、夜になると教室は真っ暗になり、その後も水道の水はまったく使えませんでした。

こうした状況が1週間ほど続きましたが、少しずつ落ち着きをとりもどし、周りの人たちことを考えられる余裕（よゆう）も少し出てきました。

《 や っ て み よ う 》

お年寄り・障がい者・小さな子どもなどの立場になり、「どんな事が困る」か班ごと実際に活動し考えてみよう。問題になる場所（6年教室見取り図）に○シールをはり「どんな事が困る」かふせん紙（赤）に書き同じ場所にはってください。



《考 え て み よ う》
 班ごとあげた問題点をどうすれば解決できるか、みんなで考えその解決策をふせん紙(青)にまとめ、赤のふせん紙の横にはってみよう。

《ふり返りまとめてみよう》

- ◇今日の学習をふり返り、**自分自身の感想**や災害時(避難時)において、よりよい避難所(みんなが安心して過ごせる避難所)にするために、**自ら進んで相手のためにやってみよう**をまとめてみよう。

6 成果と課題

(1) 児童の意見

- ・私は教室で車いすの人達の立場になってみて、体育館とは違ってせまいので、教室の方が大変なんだと思った。特に教室のドアが重いので、手の不自由な人たちの立場だと開閉が難しいと感じた。でも、ドアを外す・予め開けておけばよいという友だちの意見を聞き、とてもよい考えだと思った。自ら進んでとりくんでみたいことは、こうしたとりくみ以外に、相手に「お手伝いしましょうか」と声をかけてから活動してみたい。また、障がいがある人たちのために、テレビや机などを廊下に出してあげたい。
- ・乳幼児やお年寄り、障がい者の気持ちや立場になってみると、今まで考えもしていなかった不便な所がたくさんあることが分かった。避難時には自分だけでなく、友だちとも協力し合い相手の意志(サポートの必要性)を確認しながら、こうした人たちの手助けになることをおこないたい。



- 体育館と違って教室の広さが違うので、目の不自由な人や車いすの人たちには危険がいっぱいあると思った。また、電気や水道が使えないといことは私たちも困るが、私たち以上に乳幼児や妊婦さんには厳しいかなと思った。避難時にはこうした人たちのために進んで支援（補助）活動に頑張りたいと思う。

（２）授業者の反省

- 本授業を実施するにあたり、事前に教室（体育館）で車いす体験やアイマスク体験を全員がおこなった。こうした実体験をもとに災害弱者といわれる方々にどのような問題が起こるのか具体的に体感（イメージ）することができ、相手の立場や気持ちになって真剣に物事を考える（共感）ことができた。
- 多くの児童が、授業を通じて学んだことを災害時（避難時）の生活に生かしていこう、実践していこうとする態度（意欲）の向上につなげることができた。
- 参加体験型の学習を仕組むことにより、多くの考えや意見を児童から導き出すことができた。また、友だちの考え（グループ内や他グループ）を知り、新しい発見や気づきにつなげることができた。授業後半で実施したシェアリングの場では相手の考えや意見を参考に、自分の考えや具体的活動方法についてさらに深化を図ることができた。
- 体育館や教室において様々な体験（乾パン試食、車いす・アイマスク体験・停電・断水体験）を行ったが、多くの児童が乳幼児やお年寄り、障がい者の立場になって考えることはできていたが、外国人や妊婦といった立場では考え（イメージ）にくく、こうした立場からの意見はなかった。



（３）研究協議から

- 少人数の良さ（活動時間・相互の関わり・学習環境）が活かされた授業であった。
- 本時の学習に向け、事前学習や実体験を行ったことにより、自分なりの考えを予めしっかりと持つことができ、それらを一人ひとりが表現（文章・発言）することができていた。
- 付箋紙への表記方法、全体への発表方法などが徹底されていた。付箋紙（３色）を用いたことで、多くの児童が問題点（赤）・解決策（青）・感想（黄）を視覚的に捉えることができた。



- グループ内の活動（話し合い）では、たくさんの意見が出され、それに対して互いに質問したり、別の考えを提示したりするなど、充実した話し合い活動ができていた。また、共感的に授業が進められていてよかった。
- 外国人について考えることは、地域性もあり難しいのではないかと。簡単な掲示物や具体例を挙げながら授業を進める方法もあるのではないかと。
- 様々な問題点について多くの解決策を児童が考え付箋紙にまとめていたが、「自分たちができること」「自分たちではできないこと」にわけてまとめられると、さらに自分たちの考えを全体で深めることができたのではないかと。

（４）まとめ

これまでの人権教育では、だれに対しても差別する心や偏見を持つことなく、公正・公平の大切さを自覚すること、また、よりよい社会の実現（人権を守る・大切にすること）に努めようとする心情や態度を育むことをねらいとする、人権に関する客観的理解を主にした実践を多く行ってきた。今回人権教育のさらなる広がりやねらいとして、初めての試みとして参加体験型の学習過程を仕組み、防災教育の観点も取り入れながら人権教育（学習）を実践した。車いすやアイマスク体験などの実体験を通じて、自らの視点ではなく災害弱者という別の視点から物事を見つめることにより、相手の立場をイメージする想像力や、相手の気持ちや思いに寄り添う共感能力を高めることができたと感じる。また、相手の立場を尊重した言葉がけ（相手の意志や希望を確認）についても、多くの児童が意識できることが確認でき、コミュニケーション能力についても高まりがみられ、今回の人権学習を通じて、児童の人権感覚や人権意識の向上につなげることができたと思う。

当初の学習計画では2時間を予定していたが、様々な体験活動を取り入れたことにより本時も含め4時間となってしまった。児童が考えた解決策を実際に試してみるなど、さらに防災教育・人権学習の発展充実を図っていく上で、学習計画の見直しを進め継続的なとりくみをおこなっていきたいと考える。

今回の授業では、災害時（避難時）における人権について考える中で、児童の共感能力・感受性、想像力、コミュニケーション能力といった人権意識の育成にとりくんだが、別の観点（いじめ・国籍・経済格差・戦争等）からも授業を仕組んだり、授業形態の工夫（参加体験型学習）をおこなったりしながら、さらなる人権感覚・人権意識の高まりをめざしていきたいと考える。



